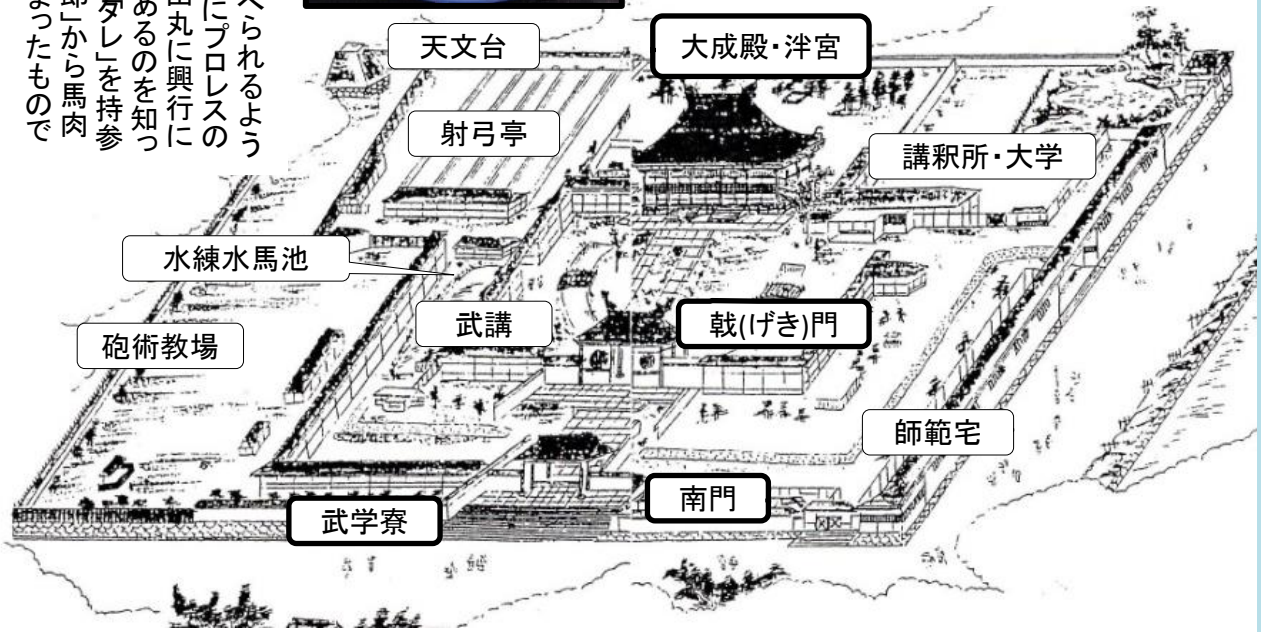
馬刺しと日新館

会津若松市内にある
日新館の泮橋

泮(はん)とは学校を表します。武学寮には剣術の道場がありました。戟(げき)とは中国の武器で「ほこ」

会津の刺しが、生で食べられるようになるのは、昭和30年にプロレスの「力道山」が若松城西出丸に興行に来て、会津には馬肉があるのを知っていたので、自宅から「タレ」を持参し、西七日町の「庄次郎」から馬肉を買い、食べたのが広まったものです。



寛政十年(一七九八)、会津藩家老田中玄宰により計画。会津藩御用商人須田新九郎が資金を寄付し、享和三年(一八〇三)完成。東西約一二〇間、南北約六十間あった全国屈指の藩校です。十歳になると日新館に入学します。十五歳までは素読所(小学)に属しました。素読所を修了した者で成績優秀者は講釈所(大学)への入学が認めます。さらに優秀な者には、江戸や長崎へ遊学しました。嘉永五年(一八五二)二月六日には、長州藩の吉田松陰が訪れています。

講釈所(大学)では、日本最初の給食、メニューは、お握り、汁、漬物、たまに秋鮭を出しています。日本最古のプールもあり。戊辰戦争で焼失、天文台跡が残っています。

仲の掟(じゅうのおきて)

六歳から九歳まで「仲」という藩士の子弟集団がありました。座長の「仲長」が心得の「仲の掟」を話しました。

一、年長者の言うことに背いてはなりませぬ
二、年長者には御辞儀をしなければなりませぬ
三、虚言をいふ事はなりませぬ
四、卑怯な振舞をしてはなりませぬ
五、弱い者をいぢめてはなりませぬ
六、戸外で物を食べてはなりませぬ
七、戸外で婦人と言葉を交えてはなりませぬ

○平石弁蔵『会津戊辰戦争』慶応四年(一八六八)八月

「各方面から傷病者が運ばれてくるので、戦史』八月二十三日日新館を臨時病院に宛て収容し、幕府の医者松本良順が院長として、治療をしました。この時、牛馬を屠殺(とさつ)して、患者に食した」のが会津地方の肉食の始まりです。

○山川健次郎『会戊「西出丸より火箭(ひや)を射て之を焼く、傷兵歩することを得たる者は城に入り、歩する能(あた)はざる者は自刃す」と会津藩で火を放って日新館を焼いています。

照姫が陣頭指揮

○籠城戦中、傷病者に給する食物は、照姫様が監督し、本丸西隅に炊事場を設けた。羹蔬(こうそ・野菜を煮た汁)魚肉鶏肉牛肉等を添え病室に運んでいます。